ISSN 2189-8731

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

島嶼研だより

No.70　鹿児島大学国際島嶼教育研究センター　2015 年 10 月

主な記事

国内フィールド拠点「奄美分室」設置について（河合　渓）　p1
学生奮闘記「植物から歴史のつながりを感じる」（亀井理世）　p3
フィールドこぼれ話「食事とトイレは気をつけて」（坂巻祥孝）　P11
連載　とうがらしに旅して
　第十一回「三島村黒島は唐辛子の産地だった？」（山本宗立）　p12

国内フィールド拠点「奄美分室」設置について

国際島嶼教育研究センター長　河合　渓

鹿児島大学は本土最南端に位置する総合大学で、その中の組織である国際島嶼教育研究センター（島嶼研）は全国で唯一「島」を対象に教育研究を行なっています。約 35 年の歴史ある島嶼研ではアジア太平洋の島嶼を中心に教育・研究を行なってきました。その歴史の中で何度か改組を繰り返してきましたが、現在の島嶼研は平成 22 年に多島圏研究センターから改組されました。そして、その改組時に国内外にフィールド拠点を設置することを構想として描きました。その目的の達成のために、国際島嶼教育研究センター国内フィールド拠点「奄美分室」を鹿児島県奄美大島に平成 27 年 4 月に設置しました。

島嶼研には4名の専任教員が所属しています。島嶼研奄美分室設置に伴い、分室の運営のためこの専任教員の中の一人が時期を分けて奄美分室に常駐することにしました。すでに平成 27 年 5 月は河合渓、6 月は山本宗立准教授、7 月は大塚靖准教授が、そして 8 月から来年 3 月までという最も長い期間は高宮広土教授が常駐します。高宮教授は平成 27 年 4 月に国際島嶼教育研究センターに赴任したばかりで、専門は奄美・沖縄の先史人類の研究です。また、運営の補佐をしてもらうために、現地採用の事務補佐員 1 名も雇用されています。

この島嶼研奄美分室は鹿児島大学と地元を繋ぐ窓口になり、地域住民への大学研究者の紹介や地元での公開講座やシンポジウムの開催など、地域への知の還元を進めていく予定です。その一環として、奄美分室では地域住民に研究成果を紹介する「奄美分室で語りましょう」を島嶼研奄美分室で開催したり、鹿児島キャンパスで行っている島嶼研研究会を動画でつなぎ奄美分室で参加できるようにしたり、地元の高校に講師として参加し研究成果を紹介したりしています。

また、この奄美分室を中心に様々な教育研究プロジェクトも推進しています。特に平成 27 年度は「薩南諸島の生物多様性とその保全に関

する教育研究拠点形成」というプロジェクトを推進しています。これは鹿児島大学の 40 名程度の研究者が薩南諸島の生物多様性に関する研究を行い、文理融合的な視点から、世界自然遺産候補にもなっている奄美群島を中心とした鹿児島県島嶼域での科学情報の提供や人材育成を推進していくものです。このプロジェクトにより特任助教 1 名とプロジェクト研究員 1 名が雇用され、島嶼研奄美分室に常駐し活動を行っています。このプロジェクトでは成果還元の一環として、地元の新聞に毎週参加者がコラムを執筆させていただいており、これを一冊の啓蒙書として出版をして行きたいと考えています。

その他の活動として、平成 27 年 9 月 26 日には水産学部の鈴木廣志教授と山本智子准教授を講師に迎え奄美市住用干潟において、小学生・中学生を対象に干潟に生息する生物の観察会なども行っています。この観察会には二十数名の市民の方に参加していただき、またその時のアンケートにも非常に良かったという意見を多数いただき盛況に開催することができました。これらの活動は Facebook（https://www.facebook.com/amamist.kagoshima.u.jp）でも見ることができます。

国際島嶼教育研究センターは、鹿児島の地理的特徴であるアジア太平洋の窓口として、アジア太平洋島嶼域、そして新たに設置した奄美分室を中心にして鹿児島県島嶼部に密着しながら、教育研究、そして地域貢献を推進していきたいと考えています。

国際島嶼教育研究センター奄美分室（奄美市水道課 2 階）

奄美分室看板

住用干潟観察会

郡元と奄美分室をネットで接続して
奄美の高校生も参加する研究会

学生奮闘記

植物から歴史のつながりを感じる

亀井理世（鹿児島大学大学院教育学研究科）

「質問本草」は 230 年前に薩摩藩で編纂された植物図鑑である。私は初めてこの本を見た時、とても驚かされた。230 年前にも植物について研究されているとは思ってもいなかったからである。また、本には植物の絵も載っているが写真に負けないぐらい細かく正確に描かれていることにも感激した。この本は、明治維新の礎を築いた島津斉彬の曾祖父、島津重豪の命でつくられた。蘭癖と呼ばれた重豪は、鹿児島市のシンボルである天文館に天文台をつくった人物でもあり、天文館には銅像も建てられている。

身近にある植物を薬として使えないかと中国の医者や学者に植物の名称や用途などを質問し、集めた情報をまとめたものが「質問本草」で、160 種の植物が載っている。記載されているのは、公園や空き地で見られるような身近な植物から、現在は花壇に植えられているような園芸用の植物や海外から取り寄せた植物まで、幅広く載っている。この本の植物を見ていくと、当時の薩摩藩の人々の思いが伝わって来た。

私は家にあった祖父の薬草の本を読んで以来、薬草と歴史に関する研究ができないかと考えていた。有用植物と歴史との繋がりをいろいろ調べていくと「質問本草」という本にたどり着いた。そして、「質問本草」を自分の研究の対象にすることにしたのである。「質問本草」は植物の名称と絵、効能などが記載されているが、その植物が採集された場所の詳細が記載されていない。そこで私は、「質問本草」に記載されている植物は江戸時代どのような場所で採集されたのかということを検討することにした。この本に記載されている植物が現在どのような場所でどれくらい見られるのか調べるために、公園の草地を対象に植生調査を主に行った。さらに森林や草原など様々な植生の既存の調査資料を収集した．そして、その時代、鹿児島県にはどのような植物があったのか考察した。それまで、自分一人で植生調査をしたことがなく、植物を見て種名を判別できるほどの知識や技量もなかったため、調査に時間がかかってしまうこともあった。しかし、調査を重ね何度も植物を採集するうちに知識が増えていくのを感じた。また、集めたデータを整理していくと、本に記載されている植物には今でも変わらない植物の名前があること，私たちの身近な場所でも見られるものがあることがわかり、植物を通して昔と今の繋がりを感じることができた。

私はこの研究で自分の専門分野である理科だけでなく、小学生の時から興味のある歴史という観点からも植物について調べることで、薩摩の人々と自然のつながり、人々の思い、薩摩藩の意向や西洋の文化に対する熱い思いなどを改めて感じることができた。理科の世界は様々な分野でつながっている。自分の専門分野からだけでなく、自分の興味のある様々な視点から理科を知ることの楽しさを実感した。

薩摩藩吉野薬園（鹿児島市吉野小学校）の跡地での植生調査

佐田旧薬園（南大隅町）での植物観察

鹿児島大学群島拠点「国際島嶼教育研究センター奄美分室」設置記念式・記念講演会

平成 27 年 4 月 25 日（土）に鹿児島大学奄美群島拠点「国際島嶼教育研究センター奄美分室」の設置記念式を開催いたしました。当日は多数の皆様方に御参加いただき、盛会となりました。

看板上掲式

国際島嶼教育研究センター奄美分室にて

朝山毅奄美市長、前田芳實学長、河合渓センター長（左から）

設置記念式

奄美観光ホテルにて

挨拶

前田芳實（鹿児島大学長）

河合　渓（国際島嶼教育研究センター長）

祝辞

朝山　毅（奄美市長、奄美群島広域事務組合管理者）

鮫島秀久（鹿児島県大島支庁総務企画部長）

保岡興治（衆議院議員）

期待と抱負

東美佐夫（奄美市総務部長）

高宮広土（国際島嶼教育研究センター）

記念講演

「鹿児島大学の奄美群島における生物多様性研究」鈴木英治（大学院理工学研究科教授）

「鹿児島大学における奄美研究の現状と課題―文系の視点から―」桑原季雄（法文学部教授）

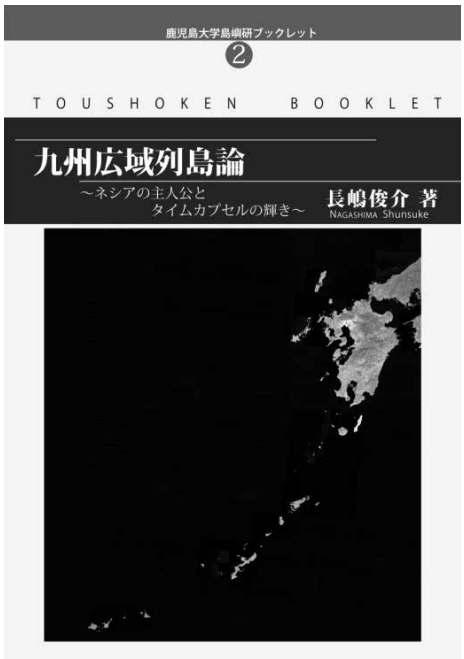
東美佐夫奄美市総務部長

記念講演をする鈴木英治教授

鹿児島大学島嶼研ブックレットの開始

鹿児島県島嶼を含むアジア太平洋島嶼部では、現在、環境問題、環境保全、領土問題、持続的発展など多岐にわたる課題や問題が多く存在します。国際島嶼教育研究センターは、このような問題にたいして、文理融合的かつ分野横断的なアプローチで教育・研究を推進してきました。現在までの多くの成果を学問分野での発展のために貢献してきましたが、今後は高校生、大学生などの将来の人材への育成や一般の方への知の還元をめざしていきたいと考えています。この目的への第一歩として鹿児島大学島嶼研ブックレットの出版という形で、本目的を目指せたらと考えています（国際島嶼教育研究センター長・河合渓　刊行の辞より）。

鹿児島大学島嶼研ブックレットは3月にNo.1「鹿児島の離島のおじゃま虫」（野田伸一著）、No. 2「九州広域列島論～ネシアの主人公とタイムカプセルの輝き～」（長嶋俊介著）を出版してスタートしました。今後も毎年 2～3 冊出版する予定です。鹿児島大学島嶼研ブックレットは一般の書店で購入できます。



国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 157 回　　2015 年 3 月 16 日

島嶼学－三兎を追う私の学問－

長嶋俊介
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

日本のことわざに「二兎を追うもの一兎も得ず」という諺がある。島嶼学では三兎を追わないと、島の島らしさを捉えられず、島の人に得心してもらえる学問にはならない、という信念で取り組んできたことについてここでは話したい。

島学を志して 45 年。三職場「官（公会計）環（生活環境）研（多島圏）」を経て、現在いる国際島嶼教育研究センターは「三柱の学際＝（海・人・土地）」「三柱の拠点（国際拠点・国内拠点・島拠点:今年奄美分室）」の場である。まだ志学の途上だが、自分なりに求めてきたものの幅と学術的挑戦について改めて短く検討してみる。「産官学（公共民）」「社会地元貢献・学術貢献・教育貢献」「島を学ぶ（島論）・島で島から学ぶ（フィールド学）・島と学ぶ（地元学）」「島内（シマンチュー学）・島外（旅ンモン学）・島出入（アイランダー学）」「島ライフの総合学術（命＝生理的生殖的存在　暮らし＝社会的・経済的存在　人生＝精神的・文化的存在）」「鹿児島島嶼学（奄美学・薩南島学・北薩島学）」「九州広域島嶼学（琉球ネシア・鹿児島ネシア・九州北ネシア）」「日本島嶼学（太平洋ネシア・日本海ネシア・内海ネシア）」「太平洋島嶼学（ミクロ・メラ・ポリ）」「国際島嶼学（大西洋・太平洋インド洋・沿海内海）」「島嶼多様性（陸島・洋島・内陸（湖/川/運河）島）（大型・中型・小型）（近接・連結・遠隔）（火山・珊瑚・地塁）（熱帯・温帯・寒帯）（里地・里山・里海：里島）（日常［防災］・非日常［被災］・修復［復興］」「認識学（島嶼学原論）—実体学（島嶼生活環境論）—実践学（島嶼産業教育医学福祉技芸）」「学際・学融・超越学」「学会連携（国際島嶼学・日本島嶼学・島嶼関連学会）」等々がその内容になろう。三兎を追わずして小島嶼はみえない。島嶼学らしさの独自性も展望もない。という基本姿勢での研究・著作をますます本格化したいと考えている。

第 158 回　　2015 年 4 月 20 日

温暖化最前線にある鹿児島の果樹生産—南北 600km の自然条件を活かして—

冨永茂人
（鹿児島大学農学部）

鹿児島県は熊本県境から与論島まで、南北の緯度にして 5°、距離にして約 600km あり、南側の約 500km には 200 以上の島々がある。このように南北に長い鹿児島県では気象条件が地域によって異なり、平均気温は大きく異なる。夏の気温は南北の差は小さいものの、秋冬季にあたる 10～3 月の平均気温は地域によって大きく異なり、島しょ地域は秋冬季が温暖で 10 月から 3 月の平均気温は高く推移している。

この多様な気象条件のために、鹿児島県で栽培されている果樹もナシ、ブドウなどの落葉果樹からマンゴーやパッションフルーツなどの熱帯・亜熱帯果樹まで多彩であり、北部および内陸部の伊佐、姶良、川薩地域ではナシ、ブドウ、ウメなどの落葉果樹が、海岸線に近い出水、日置、南薩および大隅地域ではウンシュウミカンなど常緑性のカンキツ類やビワの栽培が主体になっている。ウンシュウミカンより温度要求量がやや高いポンカンは南薩および熊毛地域での栽培が多く、さらに温度要求量が高いタンカンは熊毛、大島地域が主要産地である。指宿、枕崎、佐多地域以南では冬季の低温不足のため落葉果樹の栽培は困難で、屋久島、種子島の熊毛地域と奄美大島を中心とする大島地域では、ポンカン、タンカンに加え、熱帯性スモモの「カラリ（花螺李）」やマンゴーの栽培が多い。

冨永茂人教授

第 159 回　2015 年 5 月 18 日

小島嶼におけるサゴヤシ澱粉工業を基礎とした持続的な食料安全保障―インドネシア・マルク州を事例として―

GIRSANG Wardis
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

インドネシアにおける食料安全保障の問題点として米食への過度の依存があげられる。気候変動の影響や水不足、外的投入資材の高騰などにより、近年の水稲生産は安定しているとはいえない。米の需要が今後一層高まることを想定して、インドネシア政府は水田の拡張や灌漑の整備、肥料の提供などをおこなうとともに、米の消費量を減らすために地元食品の利用を奨励している。しかし、地元食品の潜在力に関する研究はこれまで非常に少なかった。そこで本発表では、インドネシア・マルク州における地元食品の潜在力、地元食品への嗜好性、小規模サゴヤシ澱粉工業の実態について報告する。調査の結果、マルク州には 63,900ha のサゴヤシ林が存在し、乾燥サゴヤシ澱粉に換算して一年間で 3 兆 9900 億ルピア（約 400 億円）の経済価値があると推定され、サゴヤシ澱粉はマルク州における食糧安全保障の基幹になりうることが明らかとなった。しかし、現在のサゴヤシ澱粉生産は上記の潜在力の 2%以下に留まり、また米の消費量や家計の収入が高くなるにつれてサゴヤシ澱粉の消費量が低下することがわかった。小規模サゴヤシ澱粉工業は、サゴヤシ澱粉に付加価値つけ、地元での雇用を創出し、一年間で 3 億 4650 万ルピア（約 350 万円）の純利益を得てきた。しかし、サゴヤシの高騰やサゴヤシ澱粉の低価格、労働者の低賃金、輸送費の高騰、市場への限られたアクセスなどを理由に、小規模サゴヤシ澱粉工業は持続的とはいえない。それゆえに、市場の拡大、地元食品産業による特産品の開発、現存する水田の集約化、農民組織能力の強化、地元食品工業発展のための優遇措置などが持続的な小規模サゴヤシ澱粉工業に必要と思われた。

第 160 回　2015 年 6 月 15 日

島嶼文明（？）先史・原史時代の奄美・沖縄諸島

高宮広土
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

奄美・沖縄諸島の先史・原史時代にはナスカの地上絵などの「文明的」な遺構は存在しない。しかし、最近の研究によりこの地域の先史・原史時代には世界の島々と比較して大変珍しい文化現象があったことが明らかになりつつある。まず、奄美・沖縄では 10 カ所以上の旧石器時代の遺跡が知られているが、世界的にみるとほんの一握りの島しかこの頃現生人類は到達していない。続く貝塚時代には狩猟採集民の時代であったが、奄美・沖縄諸島のような島でこれほど長期にわたり狩猟採集民がいた島も知られていない。さらにこの地域の島々では狩猟採集から農耕への変遷および狩猟採集のバンド社会から国への進化がみられたが、このような現象も世界的にみると大変珍しい。最後に島嶼環境は大変デリケートで特にヒトの集団が適応すると環境の劣悪化が起こることが「定説」となっているが、最近の研究によるとこの地域では人々は環境への影響を最小限にとどめ、島の環境と調和して生存していたようである。以上の文化現象は、島嶼環境とヒトという観点からすると、それぞれ一つでも珍しい現象であるが、それが 5 つも存在したということは（科学的な表現ではないが）奇跡的でもある。また、古代エジプトなどの文明は世界で 6 カ所知られているが、奄美・沖縄諸島先史・原史時代のような文化を有した島はひょっとしたら 1 カ所のみかもしれない。その点で、ある意味「島嶼文明」と呼んでもいいのかもしれない。

第 161 回　　2015 年 7 月 13 日

法と映画―インドネシア憲法裁判所判決から見る家族像の変遷―

疋田京子
（鹿児島県立短期大学商経学科）

近年、アジア諸国において司法審査権の拡大・強化が進み、司法が政治過程や政策形成に大きな影響を与えるようになってきています。インドネシアでも 2002 年の憲法改正によって設置された憲法裁判所が、法令の違憲審査をはじめ選挙結果に対しても積極な憲法判断を行って政治的混乱に終止符を打つ役割を担っています。

こうした現象は、確かに民主的統制を受けない司法の政治化は、一方でその正当性が問われます。しかし、民主的意思形成で失敗したジェンダー問題の是正をする役割を担う可能性も秘めています。特にイスラームを抜きには語れないインドネシアの家族像の変遷に対して、憲法裁判所の判断は大きな後ろ盾になっているようにも思えるのです。

メディアのイスラームへの注目は、テロや女性抑圧ばかりに集中しがちですが、そうしたイスラームへの眼差しに対して、新たなイスラームの自画像を作り出そうとするインドネシア社会の動きに注目してみたいと思います。映画は社会の自画像を映し出すとも言われます。近年インドネシアで大ヒットした映画の中の家族像と、憲法裁判所の憲法判断に現れた「あるべき家族像」を、分析してみたいと思います。

疋田京子先生

お知らせ

（1）着任

平成 27 年度 4 月 1 日付で高宮広土氏が教授として着任しました。研究テーマは「先史時代の琉球列島における適応過程」で、専門は先史人類学です。

ミクロネシア連邦ヤップ島で聞き取り調査をする高宮広土教授（右）

平成 27 年度 4 月 1 日付で藤井琢磨氏が特任助教として着任しました。研究テーマは「薩南諸島の六放サンゴ類の多様性解明」で、専門は海洋動物分類学です。また、鈴木真理子氏がプロジェクト研究員として着任しました。研究テーマは「林道の観光利用アマミノクロウサギへの与える影響評価」で、専門は動物行動学です。藤井琢磨特任助教と鈴木真理子プロジェクト研究員は奄美分室で研究を行います。平成 27 年 3 月末で事務補佐員の德田覚子さんが退職されましたので、4 月 1 日より深川直子さんが採用されました。また、奄美分室事務補佐員に福澤文香さんが採用されました。

藤井琢磨特任助教

鈴木真理子プロジェクト研究員（右）

外国人客員教授としてインドネシア共和国・パティムラ大学の GIRSANG Wardis 氏が客員准教授として着任いたしました。招聘期間は平成 27 年 5 月 7 日～平成 27 年 9 月 18 日までです。研究テーマは「小離島における持続的な食料安全保障に関する研究」、専門は農業経済学です。

前田芳實学長を表敬訪問する GIRSANG Wardis 准教授（右）

最近の出版物

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.36, No.1, 2015

Research Papers

MOUSOURAKIS G.: Restorative Justice, Indigenous Custom and Justice Reform in New Zealand

KOEDA K. and FUJII T.: Records of the Pughead Pipefish, *Bulbonaricus brauni* (Gasterosteiformes: Syngnathidae), from Amami-oshima Island, Central Ryukyu Archipelago, Southern Japan

HATA H. TAKAYAMA M. and MOTOMURA H.: Distributional Range Extension of *Herklotsichthys quadrimaculatus* (Clupeiformes: Clupeidae) in Southern Japan

Occasional Papers

No.54 (December 2014)

New Horizon of Island Studies in the Asia-Pacific Region (YAMAMOTO S. and RAHARJO S. eds)

No.55 (March 2015)

Challenge of Integrated Disciplinary Research ── Natural Resource Uses in the Pacific Islands ── (KAWAI K. ed)

No.56 (March 2015)

平成 26 年度学長裁量経費・研究コアプロジェクト（島嶼）─国内外島嶼地域における自立的発展に寄与する研究の推進─ (桑原季雄・寺田竜太・河合渓・山本宗立編)

鹿児島大学島嶼研ブックレット

No. 1 鹿児島の離島のおじゃま虫（野田伸一）

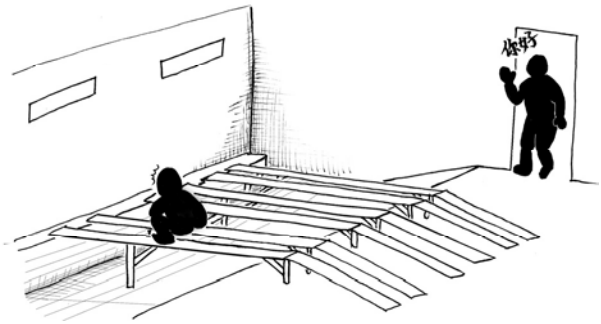
No. 2 九州広域列島論～ネシアの主人公とタイムカプセルの輝き～（長嶋俊介）

～フィールドこぼれ話～

「食事とトイレは気をつけて」

坂巻祥孝（鹿児島大学農学部）

冒頭から下世話な話で恐縮なのだが、私は胃腸が弱く、慣れないものを食べるとすぐにおなかを下す。齢 40 を過ぎてからは、特にその傾向が顕著である。私の専門が昆虫学なので、新種昆虫の採集や生態不明昆虫の調査の為にアジア各地を回る機会がある。不幸なことに食欲旺盛なので、どこに行っても食べ物がおいしく、胃腸が弱いことを忘れて、つい出された分だけ食べてしまうのである。ロシアのブリヤート州では調査地出発直前に食べたボルシチで、中国の四川省では火鍋と冷えたビールの組み合わせで、日本国内でも山村の小さな雑貨屋で買った柿の種の中のピーナッツで、いとも簡単に腹痛を起こし、下してしまった実績がある。腹痛が始まるのは決まって食後 2-3 時間。こうなると昆虫採集どころではない。とにかくトイレを探すのだ。日本国内なら森に紛れ込んで落ち葉を除ければ何とか用が足せる。しかし、海外ではそうはいかない。町で食事を取った後、すぐに高速道路に乗ってしまい目的地まで何時間も高速道路から降りられなかったり、食後に出発したら切り立った崖沿いの山道で車一台がやっと通れるような細いくねくね道を 2 時間も走り続けたり、いずれも途中で止まる場所がない。そんな場合、現地で雇ったドライバーさんに申し訳なく、また言葉も互いに通じなかったりで、「トイレ」と切り出せない。強烈な便意が寄せては返す波のように襲ってくる。ただ、無口に黙って呼吸を整える、あるいは車内で眠ってしまうしか耐える方法は無い。さらに運良く耐えきって、トイレを案内してもらえても安心できるとはかぎらない。トイレの習慣の違いに、困ってしまう場合がある。はじめて東南アジアのミャンマーを訪れた際には、案内された寺のトイレ（大変きれいだった）に、尻を拭いた紙を捨てた形跡がなく、捨てる場所もなかった。ただ、便器の脇に水を張った桶があり、柄杓が入っていた。この時は脳裏に「不浄の左手」なる言葉がよぎって、左手で処理をして、右手に持った柄杓の水を流しながら左手を洗うということに気づけた。中国の山中の集落で案内されたトイレ(掘立小屋)には便器がなく、正面の壁に向かって床が傾斜して低くなっており、その上に 4-5 枚の細い板が平行に橋渡してあるだけだった。2 枚の板にそれぞれ左右の足を乗せ壁に向かって歩いてしゃがめば、板の間の隙間が便器代わりというわけである。私が用を足していると後から来たおじさんが私の隣の板に乗ってきてやはり用を足しはじめた。見ず知らずのおじさんと二人仲良く並んで用を足すとは思っていなかった。便器間の壁がない状況には、ロシアでも出くわした。おかげで用を足している最中に他人に見られてしまうことにはあまり動じなくなった。それでも、つい先日やはり中国の食堂での昼食後に、トイレで用を足していたら、「ガチャッ」っと背後の扉が勢いよく開いた。鍵が壊れていたのである。振り向くと同時に、ご婦人が悲鳴をあげて一目散に逃げて行かれた。脂っこい中国料理に昼間から冷たいビールで乾杯を何度もさせられておなかが痛くなったので、仕方なくトイレにしゃがみ込んでいたのに・・・、トホホなのはこちらの方である。後日談であるが、このご婦人、その日から私がお世話になる現地営林署の副所長の奥方で、その後数日間行動を共にすることになった。大変気まずかったことは言うまでもない。我ながらよくフィールドワーカーを続けているなと思う。



中国の山中の掘立小屋トイレの中の様子

「とうがらしに旅して」

第十一回　「三島村黒島は唐辛子の産地だった？」

動植物が豊かな森深き島、三島村黒島。太平洋戦争時の島民と特攻隊員の交流を描いた映画『黒島を忘れない』の公開が待ち遠しい。黒島の特産品といえば、大名竹や椎茸、みしま牛がすぐに思い浮かぶが、150 年前は唐辛子の産地だったようだ。江戸時代後期に薩摩藩が編纂した地誌『三國名勝圖會』（1843）には、三島村黒島の「物産・蔬菜類」（筆者注：蔬菜は「そさい」と読み、現在では野菜と同義）に「香蕈」（筆者注：しいたけ）、「木耳」、「海苔諸種」、そして「番椒（トヲガラシ）」とある。薩摩藩領内で唐辛子が物産として挙げられているのは黒島だけであり、編纂者の目に留まるほどの唐辛子の産地であったのだろう。「番椒（トヲガラシ）」の項には、「冬月には、枝葉枯るといへども、根莖活し、春に至て又枝葉を生ず、故に其幹二十年を歴て、大なる者あり、是此島暖氣なる故に、冬月寒に傷られざるなり」と述べられている。日本で栽培・利用されている唐辛子には植物学的にトウガラシ（*Capsicum annuum*、annuum＝一年生の）とキダチトウガラシ（*C. frutescens*、frutescens＝灌木状の、つまり多年生の、日本では南西諸島と小笠原諸島に分布）がある。日本の大部分の地域では冬の寒さで枯れてしまうため、トウガラシは一年草であると思っている人が多いと思うが、両種とも熱帯・亜熱帯地域では多年草であり、低木になる。そのため、ここで挙げられている唐辛子がどちらの種であるのかを判別するのは難しいが、熱帯・亜熱帯に適したキダチトウガラシに比べ、トウガラシの方が寒さに耐性があるため、黒島の冬の気温を考えるとトウガラシの可能性が高いと思われる。20 年以上の個体がある、というのは少し眉唾物だが・・・。150 年前の黒島唐辛子を復活させ、ピリ辛メンマやピリ辛椎茸の佃煮などの特産品はどうだろう？椎茸の出汁と唐辛子の相性もいい。黒島は 2015 年 8 月末台風 15 号による甚大な被害を受けた。一刻も早い復興を願うとともに、歴史的な背景のある黒島唐辛子が地域振興の一助を担えないだろうかと期待している。（山本宗立）

編集後記

3 月 31 日で長嶋俊介教授が退官されました。これからは地元の佐渡でゆっくりお過ごしください、と言いたいところですが、変わらずいろいろな島に行かれているようです。島嶼研だよりの編集をやるようになって写真をよく撮るのですが、なかなかいい写真が撮れません。長嶋先生のようなグッと被写体に近づいて写真を撮る行動力があれば、もっとうまく撮れるような気がしています。（大塚　靖）

研究会で講演する長嶋俊介教授

島嶼研だより　No. 70　平成 27 年 10 月 31 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580　鹿児島市郡元 1-21-24
電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197
電子メイル　shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp
WWW　http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html